

小倉百人一首

1	秋の田のかりほの庵のとまをあらみ	我が衣手は露にぬれつつ	天智天皇	後撰集	650
2	春過ぎて夏来にけらし白妙の	衣ほすてふ天の香具山	持統天皇	新古今集	650
3	あしびきの山鳥の尾のしだり尾の	ながながし夜をひとりかもねむ	柿本人麻呂	拾遺集	675
4	田子の浦にうち出でてみれば白妙の	富士のたかねに雪は降りつつ	山辺赤人	新古今集	750
5	奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の	声聞くとときぞ秋は悲しき	猿丸大夫	古今集	700
6	かささぎの渡せる橋におく霜の	白きを見れば夜ぞ更けにける	大伴家持	新古今集	750
7	天の原ふりさけみれば春日なる	三笠の山にいでし月かも	安倍仲麿	新古今集	750
8	わが庵は都のたつみしかぞ住む	世をうち山と人はいふなり	喜撰法師	古今集	850
9	花の色はうつりにけりないたづらに	我が身世にふるながめせしまに	小野小町	古今集	850
10	これやこの行くも帰るも別れては	知るも知らぬも逢坂の関	蝉丸	後撰集	850
11	わたの原八十島かけて漕ぎ出ぬと	人にはつげよあまの釣舟	小野篁	古今集	850
12	天つ風雲のかよひち吹きとちよ	乙女の姿しばしとどめむ	僧正遍照	古今集	875
13	筑波嶺の峯より落つるみな川の	恋ぞつもりて淵となりぬる	陽成院	後撰集	925
14	陸奥のしのぶもぢずり誰故に	みだれ初めにし我ならなくに	源融	古今集	875
15	君がため春の野に出でて若菜つむ	わが衣手に雪は降りつつ	光孝天皇	古今集	875
16	立別れいなばの山の嶺におふる	まつとし聞かば今帰り来む	在原行平	古今集	875
17	ちはやぶる神代も聞かず龍田川	から紅に水くくるとは	在原業平	古今集	875
18	住の江の岸による浪よるさへや	夢の通ひ路人目よくらむ	藤原敏行	古今集	900
19	難波濶短き葦のふしのまも	あはでこの世をすぐしてよとや	伊勢	新古今集	900
20	侘びぬれば今はた同じ難波なる	身をつくしても逢はむとぞ思う	元良親王	後撰集	900
21	今来むといひしばかりに長月の	有明の月を待ち出でつるかな	素性法師	古今集	900
22	吹くからに秋の草木のしをるれば	むべ山風を嵐といふらむ	文屋康秀	古今集	900
23	月見れば千々にもものこそ悲しけれ	わが身ひとつの秋にはあらねど	大江千里	古今集	900
24	このたびは幣もとりあへず手向山	紅葉の錦神のまにまに	菅原道真	古今集	900
25	名にしおはば逢坂山のさねかづら	人にしられでくるよしもがな	藤原定方	後撰集	925
26	小倉山峯のもみぢ葉心あらば	今ひとたびのみゆき待たなむ	藤原忠平	拾遺集	925
27	みかの原わきて流るる泉川	いつ見きとてか恋しかるらむ	藤原兼輔	新古今集	925
28	山里は冬ぞ寂しさまさりける	人目も草もかれぬと思へば	源宗干	古今集	925
29	心あてに折らばや折らむ初霜の	置きまどはせる白菊の花	凡河内躬恒	古今集	950

30	有明のつれなく見えし別れより	暁ばかり憂きものはなし	壬生忠岑	古今集	950
31	朝ぼらけ有明の月と見るまでに	吉野の里に降れる白雪	坂上是則	古今集	950
32	山がはに風のかけたるしがらみは	流れもあへぬ紅葉なりけり	春道列樹	古今集	950
33	久方の光のどけき春の日に	しづこころなく花の散るらむ	紀友則	古今集	950
34	誰をかも知る人にせむ高砂の	松も昔の友ならなくに	藤原興風	古今集	950
35	人はいさ心もしらずふるさとは	花ぞ昔の香ににほひける	紀貫之	古今集	950
36	夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを	雲のいつこに月宿るらむ	清原深養父	古今集	950
37	白露に風の吹きしく秋の野は	つらぬきとめぬ玉ぞ散りける	文屋朝康	後撰集	950
38	忘らるる身をば思はず誓ひてし	人の命の惜しくもあるかな	右近	拾遺集	950
39	浅茅生の小野の篠原しのぶれど	あまりてなどか人の恋しき	源等	後撰集	950
40	忍ぶれど色に出でにけりわが恋は	ものや思ふと人の問ふまで	平兼盛	拾遺集	950
41	恋すてふわが名はまだき立ちにけり	人知れずこそ思ひそめしか	壬生忠見	拾遺集	950
42	契りきなかたみに袖をしぼりつつ	末の松山浪こさじとは	清原元輔	後拾遺集	950
43	逢ひ見ての後の心にくらぶれば	昔はものを思はざりけり	藤原敦忠	拾遺集	950
44	逢ふことの絶えてしなくはなかなかに	人をも身をも恨みざらまし	藤原朝忠	拾遺集	950
45	哀れともいふべき人はおもほえで	身のいたづらになりぬべきかな	藤原伊尹	拾遺集	950
46	由良の戸をわたる舟人かちをたえ	行方も知らぬ恋の道かな	曾禰好忠	新古今集	950
47	八重葎しげれる宿のさびしきに	人こそ見えぬ秋は来にけり	恵慶法師	拾遺集	950
48	風をいたみ岩うつ波のおのれのみ	くだけてものを思ふ頃かな	源重之	詞花集	975
49	御垣守衛士のたく火の夜はもえ	昼は消えつつものをこそ思へ	大中臣能宜	詞花集	975
50	君がため惜しからざりし命さへ	長くもがなと思ひけるかな	藤原義孝	後拾遺集	975

51	かくとだにえやはいぶきのさしも草	さしも知らじなもゆる思ひを	藤原実方	後拾遺集	975
52	明けぬればくるものとは知りながら	なほ恨めしき朝ぼらけかな	藤原道信	後拾遺集	975
53	嘆きつつ独りぬる夜の明くるまは	いかに久しきものとかは知る	道綱母	拾遺集	975
54	忘れじの行末まではかたければ	今日を限りの命ともがな	儀同三司母	新古今集	975
55	滝の音は絶えて久しくなりぬれど	名こそ流れてなほ聞こえけれ	藤原公任	千載集	1000
56	あらざらむこの世のほかの思ひ出に	今ひとたびの逢うこともがな	和泉式部	後拾遺集	1000
57	めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに	雲がくれにし夜半の月かな	紫式部	新古今集	1000
58	有馬山ゐなのささ原風吹けば	いでそよ人を忘れやはする	大弐三位	後拾遺集	1000

59	やすらはで寝なましものを小夜更けて	かたぶきまでの月を見しかな	赤染衛門	後拾遺集	1000
60	大江山いくのの道の遠ければ	まだふみも見ず天の橋立	小式部内侍	金葉集	1000
61	いにしへの奈良の都の八重ざくら	今日九重に匂ひぬるかな	伊勢大輔	詞花集	1000
62	夜をこめて鳥のそら音ははかるとも	よに逢坂の関はゆるさじ	清少納言	後拾遺集	1000
63	今はただ思ひ絶えなむとばかりを	人づてならで言ふよしもがな	藤原道雅	後拾遺集	1025
64	朝ぼらけ宇治の川霧絶えだえに	あらはれ渡る瀬々の網代木	藤原定頼	千載集	1025
65	恨み侘びほさぬ袖だにあるものを	恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ	相模	後拾遺集	1025
66	もろともにあはれと思へ山ざくら	花よりほかに知る人もなし	大僧正行尊	金葉集	1100
67	春の夜の夢ばかりなる手枕に	かひなくたたむ名こそ惜しけれ	周防内侍	千載集	1100
68	心にもあらで憂き世にながらへば	恋しかるべき夜半の月かな	三条院	後拾遺集	1000
69	嵐ふく三室の山のみぢ葉は	龍田の川の錦なりけり	能因法師	後拾遺集	1025
70	寂しさに宿を立ち出でて眺むれば	いづこも同じ秋の夕暮	良ゼン法師	後拾遺集	1025
71	夕されば門田の稲葉おとづれて	あしのまろやに秋風ぞ吹く	源経信	金葉集	1050
72	音に聞く高師の浜のあだ浪は	かけじや袖のぬれもこそすれ	紀伊	金葉集	1050
73	高砂の尾の上の桜咲きにけり	外山の霞たたずもあらなむ	大江匡房	後拾遺集	1100
74	うかりける人を初瀬の山おろしよ	はげしかれとは祈らぬものを	源俊頼	千載集	1100
75	契りおきしさせもが露を命にて	あはれ今年の秋もいぬめり	藤原基俊	千載集	1125
76	わたの原漕ぎ出でて見れば久方の	雲居にまがふ沖つ白浪	藤原忠通	詞花集	1150
77	瀬を早み岩にせかるる滝川の	われても末に逢はむとぞ思ふ	崇徳院	詞花集	1150
78	淡路島かよふ千鳥の鳴く声に	いくよ寝覚めぬ須磨の関守	源兼昌	金葉集	1150
79	秋風にたなびく雲の絶え間より	もれ出づる月の影のさやけさ	藤原顕輔	新古今集	1150
80	ながからむ心も知らず黒髪の	みだれてけさはものをこそ思へ	待賢門院堀河	千載集	1150
81	ほととぎす鳴きつる方を眺むれば	ただ有明の月ぞ残れる	藤原実定	千載集	1175
82	思ひわびさても命はあるものを	憂きにたへぬは涙なりけり	道因法師	千載集	1175
83	世の中よ道こそなけれ思ひ入る	山の奥にも鹿ぞなくなる	藤原俊成	千載集	1175
84	ながらへばまたこのごろやしのばれむ	うしと見し世ぞ今は恋しき	藤原清輔	新古今集	1175
85	夜もすがらもの思ふころは明けやらで	ねやのひまさへつれなかりけり	俊恵法師	千載集	1175
86	嘆けとて月やはものを思はする	かこち顔なるわが涙かな	西行法師	千載集	1175
87	村雨の露もまだひぬ真木の葉に	霧立ちのぼる秋の夕暮	寂蓮法師	新古今集	1175
88	難波江のあしのかりねの一夜ゆゑ	みをつくしては恋わたるべき	皇嘉門院別当	千載集	1175

89	玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば	忍ぶることの弱りもぞする	式子内親王	新古今集	1175
90	見せばやな雄島のあまの袖だにも	濡れにぞ濡れし色はかはらず	殷富門院大輔	千載集	1175
91	きりぎりすなくや霜夜のさむしろに	衣かたしき独りかも寝む	藤原良経	新古今集	1175
92	わが袖は夕干に見えぬ沖の石の	人こそ知らぬ乾く間もなし	二条院讃岐	千載集	1200
93	世の中は常にもがもな渚こぐ	海士の小舟の綱出かなしも	源実朝	新勅撰集	1200
94	みよし野の山の秋風小夜更けて	故郷寒く衣うつなり	藤原雅経	新古今集	1200
95	おほけなくうき世の民におほふかな	わが立つ袖に墨染めの袖	前大僧正慈円	千載集	1200
96	花さそふあらしの庭の雪ならで	ふりゆくものはわが身なりけり	藤原公経	新勅撰集	1200
97	来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに	焼くや藻塩の身もこがれつつ	藤原定家	新勅撰集	1200
98	風そよぐ櫓の小川の夕ぐれは	みそぎぞ夏のしるしなりける	藤原家隆	新勅撰集	1200
99	人もをし人もうらめしあぢきなく	世を思ふ故にももの思ふ身は	後鳥羽院	続後撰集	1225
100	百敷や古き軒端のしのぶにも	なほあまりある昔なりけり	順徳院	続後撰集	1225